あさ 9

2020

須賀忠男のBird Note

標高の高い山に
行くと
よく見かける
孔雀蝶
とてもあざやか!!

あを

九月集

佐藤　喜孝

雑詠

まならうらの満たされてゐる春の水

解體のはじめは棚の青ぶだう

雨長し殼を捨てたるかたつむり

車椅子宇宙のいろの木下闇

石段の口開いてゐる夏の杜

優曇華の咲く柱あり家はなし

蛇口から昭和の音か秋の聲

赤の飯をはりを知らぬ子守唄

起きぬけの時計は碇醉芙蓉

三重　長崎　桂子

隕石

今日も又川原撫子畦に訪ふ
梅雨寒や志野焼茶碗愛で啜る
梅雨の夜に轟音ニュースは隕石
黄金虫多雨に窓の桟しがみつく
梅雨晴間窓明け放し身をほぐす

東京　森　なほ子

絵扇

波立てて湯ごと追ひやる竹落葉
河音の統ぶる町なり夏の雲
薔薇紅し終着駅は出湯の町
雪渓は巨大雄鶏となりに貂
絵扇のゆるりと波紋起こしけり

東京　赤座　典子

茗荷の子

誘ひ合ひリモート演奏巴里祭
列島の疫癒えぬ地に梅雨出水
しなやかに波紋を染める錦鯉
茄子の紺きりりと我にめげるなと
茗荷の子初収穫の五つかな

埼玉　秋川　泉

夏のかほり

蓮の葉の水滴にある空の色
紫陽花や雨の波紋の手水鉢
大茅の輪押す人と入る車椅子
睡蓮のほのかな香り雨の降る
禅寺の水辺縁どる半夏生草

埼玉　大日向幸江

冷奴

冷奴酒のつまみと出す女将
夏帯に母の残り香オーデコロン
梅雨末期軒で震へる雀達
甘酒とハブ酒並べた中華街
水物をひかへる日々や盆の波

東京　七郎衛門吉保

箱眼鏡

九州を覆ふ雨雲サングラス
川遊びあめんぼ真似て喚声(こゑ)あげて
列島や夏休みない夏休み
明けの蝉明けの烏と密に鳴く
家居出て箱眼鏡めく季語探し

東京　篠田　純子

坊主バー

坊主バーに仏壇ふたつ秋暑し
マスターは浄土真宗琵琶涼し
坊主バーの虚無僧体験黴にほふ
尼僧バー牧師バー在るビル暑し
カクテルは無間地獄ぞ咽喉涼し

東京　篠田　大佳

母

空腹のきみの夢見て朝の夏
薄暗の給湯室のさくらんぼ
即席の網戸を張るや雨の昼
雀にも母のありけり大昼寝
ゆく夏やバギーを止めて煙草のむ

七月

東京　須賀　敏子

鳥達の世は変はらずに雲の峰
夏の雲鎖重たき剣岳
青大将波紋を残し向う岸
テレワーク終り通勤さくらんぼ
朝採りのキャベツをドンと台所

蛍

東京　田中　藤穂

梅雨止まず図鑑にさがす庭の草
半夏生蛸食べる日と知らざりき
七夕の阿佐ヶ谷行けずコロナ増ゆ
忘れられぬ思ひ出の数夏来る
蛍を見し日の遠し夫遠し

七月号作品より　赤座典子・七郎衛門吉保・佐藤喜孝

かしぎたる柱掛には晝寢の句　佐藤喜孝

柱の飾りとして、書画などを柱の表にかける、柱掛とも柱隠しとも言うそうである。この少し傾いて掛けられている短冊か色紙掛けには、昼寝の句が書かれているという。この句を眺めているうちに眠気を誘われてしまう。ゆったりとした午後の一時が流れていきます。（典子）

籠る日の豆をことことと街薄暑　須賀敏子

自由に外へ出られない日々のなんと長く続いていることか。アウトドア派の敏子さんには、一段とこたえることでしょう。でもめげずに、時間をかけて豆を煮ている。「ことこと」がとてもいいですね。私もテレビの旅番組で、ネガティブに自分を慰めているだけでなく、ポジティブに何かを始めることにしましょう。（典子）

古茶いれてだれかれとなく逢ひたき日　田中藤穂

一人暮らし、いや二人暮らしでも、お茶の葉は中々減らず、どうしても新鮮さが無くなってしまいます。新茶を楽しみにしてお茶を飲みながら、思うことは、久しく会っていない人の多いこと。

誰かと一緒に、お茶を飲みながら話ができれば、気も紛れるし、古いお茶の葉もすぐ無くなる。心置きなく賑やかに集まれる日を、みんな待っています。（典子）

大き房踏めば弾力杉落葉　　森なほ子

杉は初夏、新しい葉をつけるとそれにとって代わるように落葉する。その杉落葉が、大きな枝ごとどさりと落ちている。踏むとふかふかと弾力があり、作者はその感触を楽しんでいる。ぴょんぴょんとジャンプをしてみたかも。私もアラスカのツンドラ地帯で、ジャンプをしたことがありました。（典子）

封筒に土地のにほひや夏の雲　　篠田大佳

近頃は手紙のやり取りも珍しくなってしまいました。久々に受け取った手紙は、はるか離れた処からで、封筒にその地の匂いが感じられるようでした。そこは、訪れた場所？故郷のような所？大切な人の住んでいる処？遠く高い空の雲の広がりに、懐かしさが一層募りました。（典子）

着ながしに縁のなけれど橋すずみ　　佐藤喜孝

着物姿を詠んだ句、取り上げるのは着物愛好家としての責務だろう。偶然にも今日の夕刊に「短髪に黒の着流し、歯切れよい江戸弁、無駄のない所作、粋を絵に描いたような噺家十代目桂文治」の囲み記事。単衣の長着に羽織なし、足袋なし素足に雪駄履き。これを粋と言わないで何となろう

か。着ながしで、橋のたもとで風を受け流す。やはり粋だ。下町風情が見えてくる。（吉保）

芍薬のふれたる父の墨衣　　秋川泉

芍薬で知ることは「立てば芍薬、坐れば牡丹、歩く姿は百合の花」ぐらい。こうなるとネットの出番。花言葉は花の色によって、はじらい・つつましい・はにかみ・誠実などで、「花は美しい女性の姿にも例えられる」とのこと。スッと伸びた茎に十㎝ほどの花を付ける姿は、一輪でも素敵なあしらいとなるようだ。父上は何色の一輪に触れたのか、あるいは触れられたのだろうか。（吉保）

不条理に慣れてゆく日々柿若葉　　篠田純子

あれは十代の後半頃からか。自分の生き方、世界のあり方などが見えない、不満と不安が先行する年代。意味することを十分に理解できないにも関わらず、カミュー・カフカ・キルケゴール・サルトル・実存主義・そして不条理などに関心を寄せていたことを思い出す。ここ半年の世相と行動は、不条理の世界なのだろうか。他方に、存在明瞭で鮮やかで、一際目立つ柿若葉の日々。（吉保）

夕方の客に活けるや月見草　　大日向幸江

夏の夜の夕方に、白色の花びらが咲始め、朝を迎え咲き終わる頃にピンク色になり、一夜を終えるロマンチックな花のようだ。夕方にお客さんを迎えるにあたって、これを活けるとは、何と洒落

たあしらいだろうか。太宰治が御坂峠に投宿した折の「富士には月見草がよく似合ふ」と、彼の小説に記したことも思い浮かべる。しかし、この花は同属の待宵草（マツヨイクサ）のようだ（吉保）

風青し獅子頭厄払ひ臨時祭　　長崎桂子

神社の祭りに二種あり、一つは恒例祭で、神社の例祭や新嘗祭など、神社の役割として行われる祭り。対して、天皇など時の権力者からの発願などにより、特別な目的をもって実施され、後に定着した祇園祭のような臨時祭。特別な目的には、国家的危機回避の発願、なども含まれるとのこと。とするならば、今般の状況は、令和の臨時祭が必要か、などと考えてしまうことも有る。（吉保）

久々の鎖国に美しきフラワームーン　　赤座典子

鎖国を解いたのが約一五〇年前、一五〇年を「久々」といふ典子さんの気宇壮大さが分かる。どこか鎖国に憧れがあるやうに読めた。外国旅行がお好きな典子さんの本心ではないだらう。日本の雅な称び名ではなく英語の呼称。アンバランスなところが、開国への願ひがあるやうだ。（喜孝）

コーヒーのカップに新茶演歌聴く　　七郎衛門吉保

日常の形に拘らぬ生活のありさまが伝はりほほゑむ。締めの「演歌聴く」は絶品。わたしは薄手の紅茶カップで日本酒を飲んでゐる。（喜孝）

蛍　　大日向幸江

蛍、確かカワニナというものを食べていた。30才くらいまで私の家の近くにもいた。細い小川その土手に草が生い茂り蛍も元気だった。周りに建売住宅ができ始め、やがて蛍はいなくなった。巣立ったのではなく消えたのだ。

源氏と平家　　田中藤穂

主人の友達がホタルを見る会に誘って下さり、神奈川県立林野試験場（？）へ三人で出かけた。そこは以前田圃だったところを沼にして蛍の餌になる川蜷なども繁殖させているので、大量に蛍が育つのです。蛍は一晩に二度乱舞を行うそうで、時間がくると源氏蛍平家蛍一せいに闇空に舞いたって、闇空は蛍の光に満たされます。それは蛍の合婚なんだそうです。草に降り始めると一斉に草に降り、又一斉に飛び立ちます。あの夜見た蛍の大量の乱舞は今もはっきりと心に残っています。

前月抄

今朝の秋人をおもへばわれのをり　佐藤　喜孝

赤いドアの小さなカフェ夏至真昼　田中　藤穂

藤棚や心の内を見る如し　長崎　桂子

電話切るしばし眼を置く梅雨の庭　森　なほ子

吊るされてムーミン乾く五月晴　赤座　典子

真夜中を草取りに行く老女かな　秋川　泉

万緑の焔たつごと湧き上り　大日向幸江

万緑や大地再生貼る薬　七郎衛門吉保

すずめポトと直ぐなに降り来迎へ梅雨　篠田純子

茄子焼く祖母もかつては嫁なりし　篠田大佳

夏服を縫ひあげてまだ自粛の日　須賀　敏子

ハンカチのうしろで笑ふ百日紅　佐藤　恭子

喜孝　抄

はしかて集

佐藤喜孝

長崎桂子

紅型の踊り衣装が夏祓
梅雨氾濫九州地方を悲嘆にす
七夕や豪雨騒音脅かす

○残念ながら「夏祓」に疎い。一度も体験する機会がなかった。
《陰暦六月晦日に、罪やけがれを除き去るため宮中および諸社で行われる祓の行事。茅の輪をくぐったり、人形（ひとがた）を作って身体をなでて清め、それを水に流したりした。輪越しの祭り。みなづきばらえ。なごしのみそぎ。なつばらえ。〈季夏〉》

沖縄の紅型衣装で踊らるる夏祓。珍しい光景なのであらう。樹木の緑と紅型、今年のコロナに効き目のありさうな夏祓である。
○表現の目的に直球を投げ込んだ。「悲嘆にす」は違和感がある。「悲嘆す・悲嘆する・悲歎に暮れる」などと使はれる。「九州は悲歎に暮れる梅雨氾濫」など。
○雨の音は小糠雨なら「しとしと」小雨なら「ぽつぽつ」これらなら傘無しでも済むが、「ざあざあ」ともなると傘が無ければほとんどの人は駆け出す。雨の視覚的な表現はいま思ひつかないが聴覚表現はまだまだある。最近のゲリラ豪雨などは「ざあざあ」では追ひつかない。造語が必要だ。

森なほ子

香水も届かぬほどのディスタンス
差別無し紋白蝶と黒揚羽
塾へ急ぐ子らの後の夕焼空

○カタカナ語が世に瀰漫してゐる。日本語に戻しても、もうすっきりしない。カタカナで日本語として居坐ってゐる。時代のニュアンスを帯びた日本語である。この句の「ディスタンス」もコロナウイルス騒ぎとともにひろまった言葉の一つである。香水といふ季語を持ってコロナで生じた「ディスタンス」を表現してゐる。

○アメリカ、いや地球規模で蔓延してゐる人種差別。この句の「差別無し」は人種差別とは云ってゐないが、中七以後を読めば判然とする。「紋白蝶黒揚羽」とは虫の世界では差別がないよと云ふことなのか、「差別無し」は詩から離れてしまった。テーマがテーマだけに詩から離れてもよいのだが。

重くてそして自己に帰ってくるテーマである。

○一見「〈夕焼け小焼けで日が暮れて」の長閑な世界に見えるが、全く違ふ。今の児童は鴉と一緒に帰るころに、やきとりかサンドイッチを頬張りながら塾へ急ぐと、云ふ。もう帰ることのできない歌の世界なのであらう。

赤座典子

薄暗き大樹に垂るる青胡桃
百日紅ほろほろほろり露天風呂
逆上り初めて出来て蝉生る

○「薄暗き」が大樹を大樹以上に大きくしてゐる。豊かな木下闇が目に浮かぶ。

○百日紅に限らぬが落花、散花は地上や水面に暫くは鮮やかに色を保ってゐる。百日紅の淡いピンクはよく房で落ちてゐることがある。つい手にしてしまふ。作者には露天風呂の句が多い。どの句

もいで湯に心誘はれる。

山百合の香の届きけり露天風呂
露天風呂出て空色のかき氷
秋海棠の緞帳眺め露天風呂
春暁の富士大きかり露天の湯

○きっとお孫さんのことであらう。孫でなくとも自分でも我が子でも逆上がりが出来た時は一段成長した証として嬉しい。残念ながら私はいまだにその快感を知らない。細かいことだが少し気になったのは季語。成長の喜びと、いきものの誕生は喜ばしいことだが、蝉の一生を思ふと私なら違ふ季語を選びたい。

秋川　泉

異国語が響き合ひたる夏祓
みそはぎを散らして僧の読経かな
初音ミクリズムとりつつ髪洗ふ

○「大祓」は「万民の罪・けがれをはらい清めるため、六月・十二月の末日に宮中や神社で行う神事。

と。「おおはらひ」または「おおはらへ」と読む。大祓は六月と十二月に行はれるので季語ではない。辞書に「万民の」とある。「万民」は多数の人民、全国民と。元は日本に限られてゐたのだらうが、異国語が響き合ふ今の万民は地球規模。さういう夏祓におもへた。

○みそはぎの散ることが僧の読経と関係があるやうに書かれてゐる。　読経が流れるお寺の境内。みそはぎの散るほかには動くものも見えぬ静かな境内。「散らして」がこの静かさにはそぐはない。

○ワイルドな泉さんを彷彿とさせる句。テンポの速い初音ミクを聴きながらの洗髪。若者らしい光景だ。聞きなれたわらべ歌などを初音ミクで聞くとなつかしさは消えるがカルチャーショックだ。

大日向幸江

紫の夢を咲かせる布袋葵
蜩に不安のよぎる日曜日
山百合を富士の裾野で求めたり

○池の面をびっしり覆ひつくし、たゆたひながら咲く薄紫の花はまさに「夢を咲かせる」である。紫の夢が布袋葵の花の色に直結してしまふのは惜しまれる。たとへば「紫の夢を咲かせる夏の池」などと。

○蜩のなきごゑに不安感を覚えると、云はれてみれば私にもある。平安であるべき日曜日ゆゑに訳

の分からぬ不安感に包まれたのであらう。

○前二句とちがひこの句は趣を異にする。報告句に終はってゐる。原因は「求めたり」にある。ここを推敲すれば扉が開ける。

七郎衛門吉保

長梅雨にやんちゃ坊主の草も木も
長梅雨や蝉を待つ子に思ひ馳す
長梅雨や霧吹き要らずのYシャツ

○人間には鬱陶しい梅雨だが植物は我が世の春といたって元気である。そのあたりのことを吉保さんは「やんちゃ坊主」と云はれたのだらう。そのやんちゃ坊主たちもこの長梅雨にはやはりうんざりしてゐるやうに見えた。おもしろい見立てである。

○「思ひ馳す」は深い心の動きである。自分のことはともかく、長梅雨で蝉採りに行けぬ子供に思ひを馳せる良き祖父である。

○形状記憶シャツはアイロン要らずで洗濯し乾けばすぐ着れる。便利になったものである。

　と書いたところで校正子から「アイロンは掛けるのだが長梅雨で霧吹き不要」と教示があった。形状記憶シャツでもアイロンを掛けるとは知らなかった。下五「Yシャツ」の4音は切字の「や」

にそぐはない。

篠田大佳

路線図のライトブルーの涼しさよ
夏落葉役者は口を閉ざしけり
ナイターや放送席はおしづかに

○あの血管のやうに入り組んだ東京の地下鉄路線図。赤や黄、緑に交差してライトブルーのラインが涼やかにはしる。路線図で一句作るアイデアを買ふ。ただライトブルー色に涼味を覚えるのは誰でもさうではないだらうか。
○私には難解だった。少しのヒントであっ！と思ふのだらう。役者と云ふことで芸能ニュースにヒントがと思ったがさうは問屋が卸さなかった。まさかコロナ騒動と関係が。いやあるはずがない。
○スポーツ中継のアナウンサーと解説者が邪魔だなあと思ふことがしばしばある。技術解説などほかのところでやってほしい。先日サッカーをテレビ観戦してゐたら大佳君と同じ思ひになった。副音声で場内の音だけでやってますといふので切り替えて楽しむことが出来た。私なら「ナイターの」と安易にしてしまふが「や」で川柳調に流れるところを踏みとどまった。

須賀敏子

縦走を終え腕の日焼のくっきりと
到来の桃の香ほのと畳の間
アマリリス咲いたり弾む友の声

○山は紫外線が強い。標高千メートルで一割ほど紫外線量が増えるさうだ。縦走した充実感の記念の日焼けに敏子さんも大満足ではないだらうか。
○心温かい到来ものに一句作りたくなる。作句の時「到来」を意識してはいけない。いただき物そのものだけを意識して句を作られるとよい。私はいつもさうしてゐる。
○口にするとアマリリスは弾むやうな調べである。電話かで知らせてきたのだらう。友の喜びを自分のものにしてゐる敏子さん。

田中藤穂

友の住む本郷台に夕立雲
捩摺草とびとびに咲く倉庫跡
初蝉やミーンミンミン高らかに

○百人一首で知られた「天の原ふりさけ見れば春日なる三笠の山に出でし月かも」ではないが、行雲や月星を仰いだ時何故だか遠くにある人や時間に心がゆく。この句は夕立雲を仰ぎ、あゝあの雲の下は雨かしら、さう云へばあそこはあの人が住んでる方角だはと。干物の心配まではしなかったと思ふ。

○捩摺草と書いて「もじずりさう」。捩花のことである。「とびとびの」と聞くとあの著名な素十の句をすぐ思ひだす。どのやうな倉庫の跡かはわからぬが、いくばくかはそれとわかる痕跡が残ってゐるのかもしれぬ。何の変哲のない景ながら句にして改めてみると趣がある。「咲く」とまで云って力まぬ句姿がよい。「とびとびに」は使ひ方によりまだまだ生きるやうだ。

末黒野や土竜の穴のとびとびに　笹村　政子

木菟啼いて山荘の灯のとびとびに　相沢有里子

○この句とこの句の作者のお歳を知ったら、他結社の人は驚くことであらう。わたしは今年の暑さの対処法をひたすらクーラーに縋ったので気力が少々失せた。やる事が捗らないのである。この句は私にとって素晴らしいカンフル剤である。「初蝉や」と出出すうひうひしさ。「高らかに」と初蝉の命と同化した藤穂さん。疲れたなどとは云ってゐられない。『あを』には何ともありがたい指標である。

蛍

篠田 純子

中学生の頃、仙台の七夕祭りに行った。青葉城址に蛍が無数に飛んでいて、ネオンサインの様だった。

新婚の頃、椿山荘の蛍を見る催しに行った。連れて来られた蛍は少なく、弱々しく光っていた。

銀座卯波で、真砂女の俳句「恋を得て蛍は草に沈みけり」の色紙をを眺めながらビールを飲んだ。卯波のマッチを堀内一郎さんに差し上げたら、とても喜ばれた。

宮本輝の蛍川を読んで感動した。仙台の青葉城址で見た蛍の様子と、同じと思った。

伏目

木洩日や地蔵伏目に古巣みる　渡邉　友七
田掻牛いつも伏目に息あらく　鈴木多枝子
かはゆくて伏目がちなり野生菊　長崎　桂子

節目

春立つ日自己が節目の齢なり　芝宮須磨子
節目とて過去振り向けり郁子の花　山荘　慶子

襖

稲架襖稲穂輝き干されをり　栢森　定男
柿襖なかなか女が止みません　篠田　純子
襖絵の一羽の鳥の冬の旅　木村茂登子
背の襖かたかた夜の木枯が　田中　藤穂
川添ひの落人村の柿襖　篠田　純子
駅舎なる始発へ灯り霧襖　定梶じょう
爪跡が襖にのこる春の雨　佐藤　恭子
夏の山なほ襖繪に山水圖　佐藤　喜孝
襖みな外して盆の客迎へ　須賀　敏子
窯変のごとき襖絵施餓鬼寺　竹内　弘子

布施

北向観音お布施で食す栗ご飯　大日向幸江

風情

時雨れゐる寺町風情眼鏡拭く　渡邉　友七
風情あり茎立大根うすむらさき　長崎　桂子
菖蒲田の秋寂ぶ風情株寄せて　木村茂登子

不戦

瀬の温み不戦の鮎の不漁かな　七郎衛門吉保

付箋

秋霖や付箋の約束滲み出す　篠田　純子

父祖

山茱萸が目印なれや父祖の墓　関口　ゆき
父祖の地へ久に詣りて返り花　芝宮須磨子
初孫や初祖父祖母の菊日和　木村茂登子

不足

晩年不足思ひなほして心太　堀内　一郎
時戻す電力不足の夏に入る　須賀　敏子

蓋

雑煮椀味良くなれと蓋をする　松村美智子
葉桜やふたでおちつく頭蓋骨　佐藤　恭子
春疾風吹きさらはれし頭蓋骨　鎌倉喜久恵
天蓋はつるうめもどき日向ぼこ　佐藤　喜孝
吉川邸井戸に竹蓋侘助咲く　田中　藤穂
木枯や口蓋垂で折り返す　佐藤　恭子
百千鳥空井戸に蓋しつかりと　佐藤　喜孝
蓋しくも改正挫折額さかり　佐藤　恭子
米櫃の蓋に貼りけり唐辛子　斉藤　裕子
古井戸の木蓋に降りし松落葉　斉藤　裕子

雁渡し深井戸の蓋ずれてをり　田中　藤穂
おほいなる蓋あるごとし霾ふれり　長崎　桂子
早蛩や急須の蓋の位置整す　佐藤　喜孝
十二月七味の蓋の遠まはり　佐藤　喜孝
秋すだれキャビアの蓋に苦闘せる　佐藤　喜孝
梅干の蓋ずれてゐる扇風機　竹内　弘子
蓋物の紫蘇の実漬をプツと噛む　芝　尚子
蓋置に五徳の隠架四月かな　竹内　弘子
杉折の蓋の御強をとりつくし　堀内　一郎
百日紅あかいものから蓋をする　佐藤　喜孝
山國をポンと蓋せり夏の雲　篠田　純子
松手入れ辨当箱の蓋に白湯　佐藤　喜孝
穴の蓋ぐるりとめぐる犬ふぐり　赤座　典子
ふんはりと天蓋と咲く黄瑞香　黒澤　佳子
木下闇古木の杉は蓋をされ　佐藤　恭子
土鍋煮の大根飴色蓋取れば　長崎　桂子
輝やペットボトルの蓋回す　赤座　典子
梅の花積んで来し豚湯氣をあげ　佐藤　喜孝
春寒し軽トラに積むコレラの豚　田中　藤穂

豚

豚饅やお稲荷さんに脇見礼　佐藤　恭子
冬瓜の豚のはだへに似るよすが　佐藤　恭子
熊笹に子豚に似たる残り雪　長崎　桂子
豚汁にきりりと泳ぐ大根の葉　赤座　典子
豚汁お替り女子寮秋の暮れにけり　篠田　純子

舞台

稲妻や破顔の勝者大舞台　赤座　典子
秋時雨の音のかむさる能舞台　芝　尚子
青蛙舞台めく家に安息す　渡邉　友七
花吹雪舞台に主役多すぎる　長崎　桂子
石舞台中から見上げ風光る　篠田　純子
初舞台出出し遅れる子の素足　佐藤　恭子
大川を檜舞台に大花火　木村茂登子
能舞台跡も其処此処木下闇　赤座　典子

二重

吉葉山双眸二重女郎花　佐藤　恭子
春の月暈の二重を占へる　早崎　泰江
待ちし甲斐ありて二重の虹の橋　赤座　典子
春風や二重瞼の犬が訪ふ　山荘　慶子
強東風や托鉢僧の二重顎　佐藤　恭子
マチュピチュに雨期の終りの二重虹　須賀　敏子
虹二重竜巻ニュース今日暮れぬ　藤野　寿子
虹二重胸ふくらませ寿会　鈴木多枝子
滝桜円く二重に囲はれて　篠田　純子
学ランに赤いマフラー二重巻き　秋川　泉
陸奥湾に二重にかかる朝の虹

庭に蛍　長崎桂子

三十才前半に住んでいた住居の庭で或る晩二ツの小さい光を見つけ蛍と分って、大層喜んだ記憶があります。其の後今の住居に移転しました。

十五年ほど前に黒澤明監督の映画のビデオで、日本の何処なのか場所は分かりませんが、撮影の腕前なのか群れを成す蛍が乱舞する様は素晴らしく、今でも目を瞑ると浮かんで来ます。近頃は、ラジオで聞き、テレビで見ることはありますが、実物に出会った事はありません。

野坂塾　秋川泉

私の故郷は「和泉町」と云う所で湧き水豊かな山葵田もあり蛍もいた。結婚して横浜寺家ふるさと村近くに住み、そこではホタルの幻想的な美しさに魅了された。しかしなんといっても野坂昭如『火垂るの墓』である。このアニメを初めて観た時の衝撃は忘れられない。妹、節子の飢えで亡くなる蛍の乱舞するシーンに嗚咽が止まらなかった。そして私は、幼い娘を連れて、戦争体験を語り継ぐ阿佐ヶ谷の『野坂塾』に行った。「野坂昭如」彼の中にある「反戦」と云う二文字をその時しっかり受け取った。

佐藤恭子遺句抄1

たんぽぽとたんぽぽのあひだのよもぎ
汚れたる両手さし出す梅の花
逝きし人忘れてしまふ梅の中
たんぽぽのほほけて業平橋の下
初夏や胸板厚き阿吽像
流連を許してゐます蠅虎
あめんぼう水の面を鷲掴み
手の汗のかよひたる子と笑みかえす
伝通院通を抜けて氷水
夏の風源兵衛堀のにほひかな

翳青きマチスの裸婦や秋深む
帚木に実の現れし日ざしあり
雨ありし道のうるほひ十三夜
空耳のやうな雨ふる秋彼岸
しじみ蝶とびたちしあと秋の草
噴煙に夕陽透きゐる薄もみぢ
泣き虫の私を連れて行って秋
日のかげり花の翳りも秋でこそ
やはやはと芒かかへて夜道かな
切株が足に花子の冬に立つ

あとがき

作品欄

作品欄の作品数変更は、五句ですとだうしても遊びごころのある句や試みの句ははぶかれてしまふ。さう云ふ句を死蔵せぬ為にも、といふ思ひも八句にした一つです。

阿佐ヶ谷句会

阿佐ヶ谷句会は、十月より通常に戻します。体調を整へてお待ちしてをります。

おばあさん

梅雨晴れのある日、近くの公園へ虫取に行く孫について行った。蝉殻をビニール袋にいっぱい詰め込んだ子や、虫篭の蝉を見てもいいよと自慢げにかざす子供達で賑ってゐた。公務員宿舎のちょっとした木立にこんなにも子供たちを喜々とさせるお宝はあることに驚いた。帰りに女の子が「おばあちゃん又ね」と云ってくれた。

八月のはじめコロナの震源地と思はれてゐる東京から北海道に行った。コロナ騒動で親類には寄ることが出来なかった。二日目カーナビもきかぬ宿に泊まった。早朝散歩してゐると犬が繋がれてゐる一軒があった。孫がこはごは近づくと犬が大層喜んで尾を振った。気配でマスクをした男の人が出てきた。ここで初めて私たちがマスクをしてゐないことに気づいた。家もまばらなこの地でもこんなにコロナを気にしてゐることにおどろく。帰り際、すこし離れて見てゐたわたしを指して「東京から、さうですか。おばあさんと一緒ですか」と云った。

（喜孝）

二〇二〇年九月号（3刷）
発行日　九月二十二日
発行所　東京都中野区中央2-50-3
電　話　090　9828　4244
ファックス　03　3371　4623
印刷・製本・レイアウト　竹僊房
カット／須賀忠男・福井美佐子・ティリ　エイマ
表紙・佐藤喜孝
会費　一〇〇〇円（送料共）／一年
ゆうちょ銀行（普）（店番 018）4586402
佐藤　喜孝（サトウ　ヨシタカ）